

News Letter

日本小児看護学会 第33回学術集会に向けて

学術集会長 荒木 曜子

(東邦大学看護学部)

第33回学術集会は、パシフィコ横浜を拠点として開催させていただきましたことになりました。

子どもたちの未来は、私たちがたどってきた景色と全く異なるでしょう。テクノロジーの進化、多様な価値観などは、成熟した社会に生きる喜びでもあります。例えば、テクノロジーによる利便性の向上は、我々の可能性を広げます。しかし、コロナ禍で開発に拍車がかかっているメタバースでの交流が進むとき、それは、in person (直接) の空間とどう違うのか。いや、in personの考え方そのものが、違ってくるのかもしれません。スマートフォン一つとっても、病棟でスマホに助けられている子どもたち、育児に活用している親たち。そこに、私たちはどのように対峙したらよいのでしょうか。

一方、子どもたちの“生きにくさ”も変化しています。子どもの7人に一人が貧困、慢性状態を抱える子どもの相対的な増加、思春期のリスク行動、ヤングケアラー、虐待の報告数の増加など、我々看護職の関わりが必要な子どもたちの様相も変化しています。

傷つきやすい子どもたちを守ってきた我々看護職が、次世代の育ちを妨げず、次世代が力を發揮し自分たちの価値觀に基づいて社会を創っていくことに任せるには、“覚悟”が必要です。よりよい社会を目指して創られる制度や法律などがその目的を達成するには、関わる人々の確実な実行と時間を要します。

テーマを「子どもたちの未来を見据え、今やるべきこと」とし、子どもたちが経験するであろう未来に思いを馳せ、私たちが今やるべきことは何かを考えていきたいと思います。開催は不測の事態に備えハイブリッド形式とし、16名の熱い企画委員一同、本務多忙な中で侃々諤々と議論を重ね、魅力的なプログラムが固まってまいりました。

特別講演1「未来の子どものウェルビーイング(仮)」の講師ドミニク・チェン氏(早稲田大学文学学術院)は、情報学を基盤に様々な領域の人たちとウェルビーイングに関する研究・活動をされています。未来の子どものよりよい状況を見据える視点をご提示いただけるのではないでしょうか。

特別講演2「未来の人口統計と世界予測、統計から考える未来(仮)」は、林玲子氏(国立社会保障・人口問題研究所)より、

未来の人口統計や世界予測から、子どもたちが経験するであろう未来をイメージするきっかけをいただきます。

教育講演1「子どもの発達の可能性と初期の相互作用(仮)」は、乳児の言語発達のプロセス研究の新進気鋭の研究者である辻晶氏(東京大学国際高等研究所)よりお話しいただきます。AIの発達やスマート育児の問題などを背景に、人と人の初期の相互作用や平等な教育が受けられる社会に向けた活動について学びます。

教育講演2「医療的ケアがあっても安心できるインクルーシブ社会を目指して」は、内多勝康氏(国立成育医療研究センターもみじの家)からです。医療的ケア児とその家族が安心して暮らせる社会づくりに向けた活動をご紹介いただきます。

シンポジウム1「ひろがれ! こどもの笑顔の場」は、当事者、地域の現場から、そして行政の立場からお話しいただき、未来に向けて看護専門職が希望をもって活動できるようなディスカッションに向かう企画者一同盛り上がっておりました。

シンポジウム2「ICTの利活用と小児看護~未来を担う人の育みを考える(仮)」は、看護サービス提供の場での、先進的なICT活用をご紹介いただきます。ICTが小児看護の可能性を拓げるインフラとして活用されるよう、共に考えていきます。

もう一つ、今回は面白い試みがあります。日本老年看護学会との合同企画シンポジウム「子どもとお年寄りが醸し出す居場所」(オンデマンド配信のみ)です。地域における世代間交流の場が様々あり、その中で醸し出されているものは何か、看護職はどういう関わるのかを考えていきたいと思います。

その他、ランチョンやセミナーも多数企画されており、いずれも小児看護の臨床現場、そして、未来を見据えて看護職が活動するための有益な情報提供やディスカッションの場になるでしょう。

初夏の横浜で、あるいはオンラインで、一人でも多くの子どもに関わる看護師に、何か「ときめき」を感じてもらえたなら嬉しいです。



【ご報告】倫理委員会企画研修 (Web) : 子どもの声は届いていますか ～子どもにとっての「最善の利益」を考えるために～を開催いたしました。

● 委員長 三輪 富士代

委 員 石浦 光世、坂田 友、品川 陽子、高谷 恒子、松岡 真里、松本 貴子

倫理委員会では、これまで臨床現場の中で“モヤモヤすること”を出し合ってディスカッションを行う研修会を実施してきました。その2回目として、2023年1月7日は、“子どもの声は届いていますか～子どもにとっての「最善の利益」を考えるために～”と題した研修会(Web)を開催いたしました。日常のケア場面の中で感じる“モヤモヤすること”を現場で解決していくためには医療者間で話し合うことが必要です。しかし、その話し合いを難しく感じることも少なくありません。本企画は、臨床場面で話し合っていくために大切なことは何か、話し合いを難しく考えることなく進めていくために、私たち一人ひとりの看護者が果たせる役割は何かを学ぶ研修として計画しました。

医療機関(病院)や教育機関、訪問看護ステーション、保育園、行政機関などにご勤務される314名(うち、学会員229名、非学会員85名)にお申し込みいただき、当日は270名以上の方にご参加いただきました。講師の笹月桃子氏(西南女学院大学保健福祉学部教授/九州大学大学院医学研究院・小児科医師)のテーマは、「小児医療における倫理的課題と話し合い」でした。子どもをめぐる倫理を考えることは臨床倫理の域を越えて生命倫理、さらには社会という大きな枠の動きを踏まえるとともに、現場で考えている“子どもにとっての最善”や“子どもの権利”を基本姿勢としていく重要性を解説いただきました。その上で、子どもが“そこにいる”事実と多様化する価値観を混在させずに、子どもが主語となる話し合いを“家族とともに”医療者は心を尽くし、一人ひとりのその子どもにとっての正解に近づけていくことの大切さについてご講演いただきました。次に、三輪富士代氏(福岡市立こども病院看護部長・小児看護専門看護師)のテーマは、「小児看護の現場における話し合い～子どもが主語になっていますか～」でした。子どものいのちをめぐる治療

選択などだけではなく、日常のケア場面における倫理的課題について感受性を高めるための倫理指針の活用や、所属施設での「倫理コンサルテーションチーム」の取り組みを紹介いただきました。また、臨床の場での倫理カンファレンスでの具体的な例を取り上げながら、医療者が求める理想や期待を子どもや家族に求めていなか見直すことや、何のために話し合っているのかに立ち返り、対話をし尽くす大切さと看護者の役割についてご講演いただきました。

講演後、ご参加の皆様から講師に伺いたいアドバイスや効果的なアプローチに関するご質問などを多くいただきました。質疑応答の時間が限られており、すべてにお答えすることが叶わず大変申し訳ありませんでした。

研修後のアンケートでは198名の皆様より、研修への参加を通して、「子どもを主語に考え話し合いをしたい」「自分の価値観の偏りに気づき自分が何にモヤモヤしているのかが明確になった」「事実と価値を分けて考えることの重要性」「考え方や検討する順序やプロセスについて理解できた」など、多くのご意見・ご感想をいただきました。このように多くの方にご参加いただき、多岐にわたる質問やアンケートへのご意見からも小児看護に携わる方々の倫理的課題とその話し合いに対する関心・意識の高さを委員一同、改めて感じ入りました。本当にありがとうございました。

小児看護における倫理研修の継続を希望する声やシリーズ化への期待もいただいたことを受け、これからも、学会員の皆様とともに子どもの権利を擁護していく倫理委員会の活動を続けていきたいと考えております。(記載:高谷恒子)



【ご報告】「小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針」を改訂いたしました！

● 委員長 三輪 富士代

委 員 石浦 光世、坂田 友、品川 陽子、高谷 恒子、松岡 真里、松本 貴子

日本小児看護学会倫理委員会は、子どもたちの権利を擁護するために検討を続け、『小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針(2010年)』『『子どもを対象とする看護研究に関する倫理指針(2015年)』『子どものエンドオブライフケア指針(2019年)』を作成してきました。

2010年に『小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針』が作成された背景には、子どもを取り巻く倫理的課題が山積している中で、小児看護に携わる看護者が子どもにとっての最善を目指すために、倫理的思考から倫理的実践に至るプロセスで役立つガイドラインが必要となったことがあげられます。それから10年が経ち、小児看護の場面では子どもたちの権利が守られ、倫理的配慮が十分になされるようになったのでしょうか。現代の小児医療の現場では、ますます疾患の重症化、治療の複雑化が生じ、医療的ケアが必要な子どもも年々増加傾向にあります。治療の中止や差し控えなど、子どもの“いのち”に関わる重大な意思決定の場面に看護者も意識を向け、多職種で話し合うなど、関わりの場面は多くなってきたと思います。しかし、倫理的課題は、子どもの“いのち”に関わる重大な意思決定の場面にのみ存在するものではありません。日常的な臨床場面や看護ケアの場面において、看護者が気づいていない、もしくは気づいていても対処されていない倫理的課題が多くあると思います。

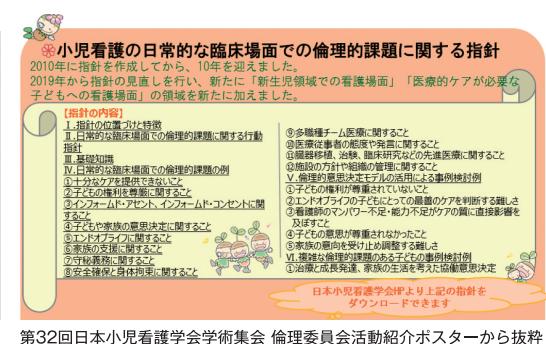
そこで、10年経過した現状や課題を念頭におきながら、指針内の表現、事例、モデルとして示した分析内容全体の見直しを行いました。指針の構成や骨子はこれまでと同様としましたが、主な見直しのポイントは①現代の医療の状況に相応した表現や事例への修正、②「新生児領域での看護場面」「医療的ケアが必要な子どもへの看護場面」の事例の追加、③複雑な事例についての分析例の追加の3点です。②の追加は、これまでの指針に示されている場面が、いわゆる小児病棟の状況を反映したものが多く、新生児や医療的ケアが必要な子どもの看護を提供している看護者からみて、現場での想定が難しいといった意見をいただいたためです。③は、実際の小児看護の現場では様々な要因

が絡みあつた複雑な事象が生じているため加えました。ただ、対象者や場面を特定位して全てを事例として示していくことには限界があります。そのため、それぞれの現場での、子どもの状態、状況、気がかりとなっていることに合わせて、考えるポイントが記されている指針の箇所を参考にひも解いていただきたいと思います。

2022年に実施した学会員対象の「小児看護における学会作成の倫理指針の活用状況、及び倫理的課題の現状についての調査」結果は、現在分析中ですが、本指針を実際に活用して「役に立った」と回答した方からは、「悩んだときに助かっている」「指針を読むことで倫理的課題に気づかされた」など指針の有効性を示す記載をいただいている。今後さらに指針が広く活用されることで、子どもへのケアが子どもの権利や尊厳を守るものとして変化していくことが期待されます。

本指針が、小児看護の日常的な臨床場面において、医療施設の看護者はもちろんのこと、医療施設に限らず在宅や学校、保育園などで働く看護者が、倫理的な実践を行えるために、課題を整理、分析し、現場の人々と話し合いができるツールとして、活用していただければ幸いです。

今後も子どもの権利を擁護する倫理委員会の活動を学会員の皆様とともに取り組んで参りたいと考えております。(記載:坂田友)



国際交流委員会2022年度研修会 「海外の小児看護領域APN (CNS、NP、DNP) の教育が目指すもの -コンピテンシーに焦点を当てて- (会員限定)」の報告

● 国際交流委員 加藤 令子、金泉 志保美、藤田 優一、本田 順子、名古屋 祐子、西川 菜央

企画の目的

日本では1997年に小児看護専門看護師教育が開始され、2001年11月小児看護の分野が特定、2002年5月に個人認定で初めて小児看護専門看護師が誕生しました。2021年12月の認定者数は288名です。また、2022年度の小児看護専門看護師教育課程は35大学35課程で、小児NP教育は1大学で行われています。

現在、日本では今後のAPN教育(特にNP)の方向性を検討することが示されています。CNS、NP、DNP教育を世界で初めて開始した米国、また、ヨーロッパでの小児看護領域APNのコンピテンシーを知ることで、日本の小児看護領域における今後のAPN教育の在り方を検討する機会となることを期待し、本テーマでの研修会を企画致しました。

企画内容：3セッションを設け、4名の方にご講演いただきました。

【セッション1】

「アメリカの小児看護領域APN(NP,DNP)に求められているコンピテンシーとは」
講師:Nicole Beckmann, PhD, CPNP(St. Catherine University)

Pediatric NP and DNP Tract Coordinator

【セッション2】

「アメリカの小児看護領域APN(CNS)の教育の現状」
講師:Lori M. Rhudy, PhD, APRN, CNS(Winona State University)

Department of Graduate Nursing Chair

講師:Cathy Cartwright, DNP, PCNS(Children's Mercy Kansas City)
Director of Advanced Practice Professional Development

【セッション3】

「アイルランドの小児看護領域APN(CNS, NP, DNP)の活動」
講師:Suja Somanadhan, PhD(University College Dublin)

Programme Director Graduate Diploma in Emergency Nursing(Children)

実施時期および参加者数

本企画は、2022年11月3日(木、休日)13時～14時30分にZOOMで開催、参加者は63名(うち6名委員)でした。その後、会員の方に広く情報提供を行うため、オンライン配信期間を2022年11月24日(木)～12月27日(火)としました。その結果アクセス数は60回であり、全体で約120名の会員の方が本研修会に参加されました。

アンケート結果

11月3日の参加者63名中35名(回収率55.6%)の方から回答を得ました。

・参加者の背景

参加者を年齢別にみると40歳代と50歳代で80%(各14名)であり、次いで30歳代でした。所属先は教育機関約49%(17名)、医療機関40%(14名)で、内、CNS認定を受けている方は46%(16名)でした。

・本企画の開催を知ったのは、学会からのメールが1番多く約83%(29名)でした。

・本企画に参加しようとしたきっかけは、「国際的な動向を知りたかった」「CNSとして海外のAPNの活動に興味があった」「CNS教育の将来の方向性について情報を得たかった」等でした。

・各セッションへの興味は、3セッションとも約90%の参加者が興味深いと回答しました。

・本企画への感想・意見として、「テーマ設定や時間設定が良く、このような企画を続けて欲しい」「海外の教育も参考にしながら、日本のAPNの在り方や教育について改めて考えたい」「小児のプライマリー領域の高度な看護実践はすでに日本でも必要とされている」「海外におけるAPNのレベルの高さに驚きと感銘を受けた」「海外の先生たちの講演の後に、海外と日本の違いを理解している先生方がトークするセッションがあると理解が深まったかもしれません」「リアルタイムでのプレゼンテーションだと思っていたので、講師の先生と直接ディスカッションできなくて残念です」等でした。

・アンケートの最後に、今後、国際交流委員会に希望する企画について質問した結果、「今回の様な研修を定期的に開催して欲しいと感じた。モチベーションに繋がります」「プライマリケアや公衆衛生に関しては、アジア圏の事情などを知ることで日本の小児看護に還元できる内容はたくさんあると思います」等の回答がありました。

まとめ

本研修会の参加者35名のアンケート結果から、参加した方々は海外の小児看護領域のAPNの背景や状況を知ることで、日本における今後的小児看護APNの在り方にについて考えるきっかけとなったことがわかりました。

今後も国際的な情報を提供する企画を計画し、会員の皆様に国際的な動向を提供するとともに、国際交流活動を発展させることに努めてまいります。

「小児看護スキルアップ研修」のご紹介と報告

本学会設立30周年記念事業として2020年12月にスタートしたスキルアップ研修は、開始から2年半が経過しました。現在研修の運営を担当している教育委員会からその概要を紹介させていただきます。

少子化に伴い、成人患者との混合病棟は増加しており、そこで勤務する方や小児看護の経験が浅い方から「子どもと家族の看護は成人患者と違い難しい」という声を聞きます。また、地域で生活する医療的ケア児と家族への支援のニーズはますます高まっており、看護の提供の場は在宅のみならず、保育所や学校、福祉施設など多様化しています。学会では、このような背景から、医療機関や地域で子どもと家族の看護に携わる看護師の皆さまが働きながら小児看護の基本的かつ重要な知識と技術を効果的に学べるツールが必要と認識し、e-learningのみの「小児看護実践基盤コース」と、e-learningおよび集合研修からなる「医療依存度の高い子どもと家族の看護コース」の2コースを開設しました。

e-learningは、(株)VERSION2に委託しGlexaというe-learningツールを使用しています。受講者の申し込み受付、受講料入金確認、登録管理等の業務は本学会の事務局である(株)毎日学術フォーラムに委託しています。教育委員会は、この2社との連絡調整、受講者からの問い合わせ対応、受講者の統計、集合研修の企画・運営、教材のアップデートの検討等を担っています。

各コースとともに、学会ホームページより申し込みページにアクセスし、個人または施設単位で申し込んでいただけます。受講料は、会員は格安で、また施設単位での申し込みは受講者数に応じて価格設定しています。申し込み後、各受講者にID

● 教育委員会 委員長 来生 奈巳子

委員 岩崎 美和、佐藤 奈保、西田 志穂、野村 智実、山田 咲樹子とパスワードが付与されます。受講者は、ご自身のパソコンやタブレットなどから都合の良い時間、場所で受講することができます。ID、パスワードは2年間有効ですので休日や空き時間などに少しづつ学習を進めることができます。1回の単元は60分程度で学習できるよう作成しており、各単元の終わりに確認テストを行い合格すると次の単元に進む仕組みとなっています。自分のペースでスライドを読み進めながら学習するスライド型講義と、動画を視聴するビデオ型講義とがあります。全単元の受講を終了すると修了証が発行されます。

「小児看護実践基盤コース」は、はじめに5回の単元に分けて子どもの身体および心理社会的発達、子どもと家族の関係などの基礎知識を学習した後、新生児期から思春期までの子どもによくみられる疾病や障害の事例をもとに、その病態、治療、看護について10回の単元で学習します。2023年3月までに受講申し込み者数は732名ありました。施設単位で受講くださる方が多く、病棟や施設のスキルアップ研修などに活用いただいている。今後、さらに学会員ではない看護管理者の方々にもこの研修を広くPRし、小児看護の質の向上に役立てていただきたいと考えています。

「医療依存度の高い子どもと家族の看護コース」は、12回のe-learningと1回のオンライン集合研修で構成しています。e-learningでは、実際の動画なども交えながら障がいのある子どもの身体および心理社会的な特徴、家族の状況と思い、制度、看護について学習します。2023年3月までにe-learningの受講申込者数は966名となりました。医療機関における医療的ケア児の退院調整、訪問看護ステーション

における在宅支援のみならず、放課後デイサービスなどの障害児通所施設の看護師の皆さんにも活用いただいているます。

集合研修は、半日のオンライン研修です。同様の研修を1年に2回開催しており、e-learning12回の受講を終了した方が1回参加することができます。これまでに4回実施し、合わせて123名が受講しました。小児看護専門看護師等がファシリテーターを務め、少人数のグループワークで事例について検討します。いずれも重度の障がいがある乳児期の子どもがNICUから在宅移行する事例、幼児期の子どもで在宅療養している事例、思春期の子どもで在宅療養しており身体状態の悪化がみられる事例で、それぞれ家族も複雑な問題を抱えている状況を設定しています。受講者はこのうち1事例を選びそれについて子どもの身体アセスメントや家族を含めた看護のあり方について深く検討します。グループワークの後に参加者全

体で検討内容を共有します。受講者の満足度は高く大変好評です。なお、e-learning12回および集合研修をNICUの事例で受講することにより、診療報酬の入退院支援加算3の算定要件を満たす研修として厚生労働省に認められています。

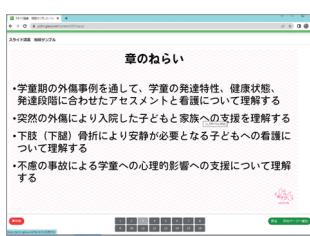
今後は、さらに受講者の確保を図り、内容の更新等を検討し、より充実したスキルアップ研修を提供できるよう努めてまいります。



トップ画面（サンプル）



医療依存度の高い子どもと家族の
看護コースサンプル画面



小児看護実践基盤コース
サンプル画面



「リレートーク」佐野 美香さん（東京都立小児総合医療センター 看護部長）

今回バトンを渡してくださった野間口千香穂さん、ありがとうございました。最初にこのリレーバトンのお話を頂いた時には、とても緊張しました。しかし、自分の今までの経験をお話することは、一つの区切りになると想いお引き受けました。

自己紹介

東京都立小児総合医療センターの看護部長を拝命し5年になります。新人看護師からずっと東京都立病院で勤務し、看護師長として働きながら、千葉大学大学院看護学研究科 病院看護システム管理学を修了しました。その後管理職として、都道府県がん診療拠点病院の駒込病院や精神科専門病院の松沢病院の経験を積んで現在に至っています。

看護師になつたきっかけ

私の故郷は高知県佐川町というNHK連続テレビ小説「らんまん」の主人公牧野富太郎先生が生まれた小さな町でした。母は准看護婦をしており、物心ついた時から夜勤をしていたことを記憶しています。そして母と一緒に買い物に出かけると、いろいろな方から、「先日はありがとうございました」と決まって感謝の言葉をいただいていました。小さい頃は、どうしてこんなに知り合いがいるのだろうかと不思議でいっぱいでしたが、多くの人から感謝される母の姿を誇らしく思っていました。大学受験の時にも、地元の高知女子大学家政部看護学科もあったものの、母親は率先して県外の千葉大学を勧めてくれ、私のよき理解者として反対する父を説得してくれました。

学生時代の思い出

千葉大学看護学部時代は、あまり授業には出ない悪い学生でした。何回も追試を受けていたので、教授からは「また君か」と顔を覚えていただきました。もちろん成績も「可」か「不可」が多かったので、友人からは「カフカ（可不可）の佐野」と揶揄されました。しかし、実習だけは真面目に参加していました。その中で、何ヶ月間も付き添いをしている家族の疲れた姿を目のあたりにし、小児看護に対する問題意識が湧いてきました。

新人時代の思い出

千葉大学の恩師である吉武香代子先生も以前勤務されていた、当時の東

京都立小児療養所、のちの東京都立清瀬小児病院の外科病棟に就職しました。その頃家族との面会は週3回で1回に2時間と大変厳しい制限がありました。この状況をどうにか改善したいと、先輩とも協力し、医師と話し合い、環境細菌について培地を用いて調査したりしました。今から考えると生意気な新人看護師でしたが、少しづつ面会制限は解除されてきました。しかし、経路別予防策が理解できていれば、もっと医師を説得できたのではないかと悔やまれます。



小児看護の魅力

小児看護だけではなく、看護は人の将来にかかわる仕事です。特に小児科領域では、人生に対する影響は計り知れないと強く感じています。いつも気持ちを引き締めながら、子どもたちのために自分は何ができるのかを問い合わせていく、自分自身に対する宿題のような仕事に誇りを持っています。

ストレス解消法

新型コロナ感染症でどこにも出かけられない時期に始めた、きもの着付けです。今では、和装教授の資格も持っていますが、気持ちを切り替えることができ、楽しんでいます。

後輩たちに期待すること

2019年から始まった新型コロナ感染症は子どもや家族に対する影響もたくさんありました。また学生の皆さんにとっては、臨地実習もかなり制限があったと思います。今後、少子高齢化で医療制度も変わっていくと思います。新興感染症の流行だけでなく、災害時対応など不測の事態でも、子どもにとって何ができるのか、仲間と一緒に知恵を出し合って、前進していく姿勢を持ち続けて欲しいと思います。

バトンを受けて欲しい人

小児看護に係る診療報酬の改定に向けていつも尽力してくださっている、神奈川県立こども医療センター副院長兼看護局長の西角一恵さんにお願いします。

一般社団法人日本小児看護学会では、会員様にメールマガジンをお届けしております。学会や研修会のお知らせや、助成金の公募案内など最新情報を配信しております。

ご登録されていない方は、是非下記URLもしくはQRコードより「メールマガジンの配信登録」をお願いいたします。

<https://jschn.or.jp/email-magazine/>



広報委員会メンバー

- 委員長：渡邊 輝子 ● 委員：筒井 真優美、西垣 佳織、新家 一輝（第61号編集長）、鈴木 千琴、杉澤 亜紀子